



カレブ通信 第三号

2011 年 3 月 15 日

内容

●各地の報告と祈りの課題

●メンバー報告

杉田 勉さんの「第二の人生」

●カレブ・ストーリー

「死と向き合う人に寄り添う」

江波戸啓悟さん

各地のカレブの会の報告と案内

東京カレブの会 (御茶ノ水 OCC)

●2月18日に畠山義則さんから「祈りの生活について」の分かち合い、その後、杉田勉さんから「第二の人生」を語っていただきました。第二の人生を主にささげ、用いていただきたいという情熱に感動させられました。今回新たに嶋本ご夫妻が参加され、よい交わりの時を与えられ感謝でした。

●3月25日「田舎で神に仕える」をテーマに新たな宣教の視点で山本文夫さん、遠藤誠一さんにお話しをしていただき、島田宏幸さんには「中途退職からの再出発」についてお話ししていただきます。みなさんの参加をお待ちしています。この大変な時、共に日本のためにお祈りしましょう。

宇都宮カレブの会 (宇都宮)

3月5日に開催。今回は「孤族社会における傾聴」について江波戸啓悟さん、宮村宗さんからお話ししていただきました。傾聴の聖書的な見方と現場の経験を互いに話し合いました。次回は4月2日、赤城二郎さんが担当してくださいます。

祈りの課題

この時、日本の救いのために

東北関東大地震の被害が明らかになるにしたがい、毎日のように新たな不安、恐れが日本に衝撃を与えています。M9.0の大地震と津波による死者、行方不明者はすでに万の単位となってきました。追い打ちをかけるような福島原発の事故で不安はピークに達しているようです。

宇都宮では、日常生活にも大きな影響が出始めています。必要な物資が手に入りにくくなっております。みなさんのところはいかがでしょうか。このような時、私たちはイエスの弟子としてどうふるまうべきでしょうか。主が私たちを祝福し、置かれた地で隣人のために用いられるよう互いを覚えてお祈りしましょう。 小川

「あなたがたは、地の塩です。もし、塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは世界の光です。…」

マタイ 5:13~16

●メンバー報告



「第二の人生」

杉田 勉

私は、大阪府八尾市の出身で、1951 年 (S.26) 4 月生まれで間もなく 60 歳になります。教会があることは以前から知っていましたが、自宅からほど近い日本基督教団八尾教会に同級生から誘われ、中学 2 年生の春に初めて教会に行きました。丁度イースターの日でゆで卵をいくつかもらったのが嬉しくて、毎週頂けるものと勘違いして、通い続けたのを覚えています。その日はイースターという特別な日であったことを知ったのは、半年くらい経った後のことでした。

教会学校の分級で学んだ「私はまことのぶどうの木 (ヨハネ 15: 1~11)」という聖句がずっと心に残ってしまして、私の信仰の始まりであったような気が致します。高校 2 年の秋、将来の進路を考えるころになりましたが、生来の楽天気分で特に何も考えず呑気に過ごしていました。

教会の牧師はじめ諸先輩から「牧師にならないか」と勧められるままにその気にな

ってしまって、高校 3 年のイースターに受洗致しました。非常に短絡的で、軽い決心でした。

その後大学に進学致しましたが、就職活動時期に、それまでの経済の高度成長時代から一転して、第二次オイルショックに見舞われ、就職は厳しいものでした。牧師になるということも、もうどこかにすっ飛んでいました。天の恵みか助けか、まずダメと思っていたキヤノン販売 (現在のキヤノンマーケティングジャパン) に就職することができましたが、大阪で仕事をしたのはわずか数年の間だけで、その後はいわゆる転勤族となりました。転勤続きによって、家族には迷惑をかけましたが、赴任した先々の教会の皆様は、家族共々暖かく迎えて下さって、私達家族の支えになり感謝の気持ちで一杯でした。

熊本に赴任した時、初めて日本福音ルーテル教会に行き、当時の健軍教会の杉本牧師と私は同い年であったことと、家族構成もよく似ていたことから家族ぐるみのお付き合いをさせて頂きました。

ある夏休みのことですが、大阪に帰省し日曜日に八尾教会の礼拝に出席したときの出来事です。礼拝後、お茶を頂きながら歓談していた時、東 (ひがし) 牧師 (当時) に「はやく八尾教会に戻って、教会のお役に立ちたい」と話したところ、東牧師は「杉田さん、あなたは仕事の都合とは言え、その地に遣わされているのです。遣わされた土地に根をおろして、神様の仕事をすべきです」と、言われました。少しショックでもありましたが、その一言に私の背中にはポンと押され、健軍教会に転会いたしました。初めての経験でした。東牧師のこの一言が、私の人生の後半へのターニングポイントと

なったように思います。

3年ほど前、同じ藤が丘教会の会員の方より、「仕事を一緒にしませんか」と、お誘いを受けましたが、私は定年まで勤めると決めていましたので、断り続けました。

しかし、まもなく父を亡くし、一昨年に次女が、昨年に長女が結婚したことで私の中で少し心境の変化が起きたように思います。

定年まであと1年と迫った2010年4月、早期退職をすることを決断致しました。現在は、アネモス（株）という小さな会社の責任者として勤務しています。アネモス（株）は、クリスチャンとキリスト教に理解ある多くの方により設立された会社ですので、営利追求ばかりではなく、何らかの形で神様のご用もしなければならぬと考え、紆余曲折はありましたが、ITによる伝道のために「JCIN」を、自死・精神的疾患対策で「NPOクオリティカウンスリング協会」を、新たに設立することができました。

どちらもまだまだ未完成で、お役に立っているとは言い難いのですが、一人でも多くの方を教会へご案内することによって魂が救われるように、また一人でも多くの貴重な人命が失われる事がないようにと祈りつつ、私を用いて下さることに感謝し、神様の召命に答えていきたいと思っています。

＊JCIN＝ジャパン・クリスチャン・インフォメーション・ネットワーク

杉田勉さんへのお問い合わせ：
senttok0403@yahoo.co.jp

アネモス株式会社 <http://anemos.tv/>
JCIN <http://www.jcin.jp/jcin/greetings.php>
NPO クオリティ・カウンスリング協会
<http://www.counselingcenter.jp/index.html>

●「カレブ・ストーリー」

江波戸啓悟さん



江波戸啓悟・裕子さんご夫妻

死と向き合う人に寄り添う

ボランティアが生き甲斐に

栃木県下都賀郡壬生町、通称おもちゃのまちに住む江波戸啓悟(72)＝キリスト宣教団・ニューライフチャーチおもちゃの町会員＝は週一回火曜日に済生会宇都宮病院緩和ケア病棟に赴き、死に直面している人々に耳を傾けている。また、悩みや不安を共有することでより良い人間関係へと導くピア・カウンセラーの養成を目的とするNPO法人「セニア・サービスセンター」代表を務めている。

10月末のある日の午後、江波戸さんが奉仕する済生会宇都宮病院の緩和ケア病棟を訪問。その日は篠笛奏者が「雪の降る町を」「遠くへ行きたい」など、日本人がよく知っている曲を心を込めて吹いていた。集まった患者、その家族らは、目に涙をうかべながら聴き入っていた。

このディールームは、様々なボランティアによ

るピアノや篠笛の演奏、マッサージ、似顔絵、語り部などが行われている。江波戸さんの役目は、訪れた患者さんにコーヒー、紅茶、緑茶などを入れて心づくしのサービスをし、寄り添うこと。緑色のエプロンを身にまとった江波戸さんはその日、患者さんのリクエスト曲のページをめくる手助けをした。

死に直面している人たちの苦悩は深く、表情は厳しい。そういう人たちに寄り添い、話に耳を傾けるのが江波戸さんの役目だ。「最後の最後まで、なんでこんな苦しい目に遭わなければならないのか、という患者さんもおられます。また、家族も同じように苦しんでいる。その精神的な痛みを少しでも和らげてあげる働きですね」

江波戸さんは、「ライト兄弟社」というおもちゃの歯車を制作する会社を経営し、その後、教材販売代理店を営んでいた。

一方、学生時代にトルストイの人生論の一節「吐く息、吸う息ことに死に近づく」に出会い、人生について考えていた江波戸さんはカウンセリングにも興味を持ち、96年から13年間、県教育委員会の電話相談ボランティア活動に従事。また61歳の時、90歳近い母が「こんなに長生きするとは思わなかった。ちょっと長生きしすぎたよ」と悔いている姿を見て「高齢者の幸せな生き方にはカウンセリングマインドが必要な時代」と痛感し、ピア（「仲間」の意）・カウンセリングを学ぶ。2000年、NPO法人「セニア・サービスセンター」を立ち上げ、研修講座を通して延べ500人のピア・カウンセラーを送り出してきた。また「死生学」で有名なアルフォンス・デーケン（上智大学名誉教授）を招いた講演会なども主催している。

そんな中、県教育委員会の電話ボランティアが70歳定年のため終了。代わりにはじめたのが緩和ケア病棟での奉仕だった。「一杯のコーヒーでも『おいしい。エネルギーをもらった』と言ってもられます。クリスマスの時、サンタクロースの格

好してプレゼントを配ったら、難しい表情の人が途端に明るくなりました。患者さんから受けることも大きい、やり甲斐のある働きです」

教材販売代理店の仕事はすでに息子に譲った。その時は「一年ぐらい喪失感で落ち着かなかった」。だが、現役の頃から続けていた電話相談、カウンセリング、そして緩和ケア病棟での働きが「定年後の新たな生き甲斐になった」という。「70歳過ぎても他の人々にお役に立っている。私の人生の中で今が一番充実しているのでは」と笑顔で語った。

<この文はクリスチャン新聞から転載したものです>

江波戸啓悟さんへのお問い合わせ：

senior_service_center@yahoo.co.jp

